

3) 県内における学校管理下での突然死の状況について

佐藤 勇 (新潟大学 小児科)
渡辺 繁子 (新潟県環境保健部
公衆衛生課)
塚野 真也 (国立療養所新潟病院
小児科)

昭和53年より62年における、県内の学校管理下での突然死の状況について報告する。この9年間で学校管理下での突然死は、32例認められた。内訳は、保育園児1例、小学生7例、中学生12例、高校生12例であった。剖検を施行されている例は5例であった。また原因が推定されている例は8例であった。過去3年間のアンケート調査では、心電図検診を実施している学校は突然死例のあった14校中1校であり、特に高校では全校で問診表および校医の診察による抽出方式が取られていた。一部で希望者による有料検診を行っている高校も見られたが、受診率は低率であった。

4) 当科における突然死例の検討

鈴木 薫・渡辺 賢一 (桑名病院
循環器内科)
相沢 義房 (新潟大学
第一内科)

過去1年半の、当科突然死(SD)例は6例であった。内訳はAMIのshock死3例、vf2例、不整脈死疑い例1例(不整脈例)であった。AMI例は、症状出現後2~6時間で心肺蘇生が必要となった。vf例はDCM1例、pacemaker(PM)例1例であり、不整脈死疑い例はHCM例であった。DCM、HCM例は、無症候性の非持続型VTが確認されていた。PM例は、VTの出現はなく、最初に確認されたVTよりVfへ移行した。AMI例は症状発現後、心肺蘇生まで数時間の余裕があったが、不整脈死例は、全例症状を訴える余裕はなかった。AMI例はCAG所見などより突然死の予測が可能と思われたが、不整脈死例では突然死の予測は困難と思われた。

5) 新潟県における突然死の実態

—死亡小票より—

林 千治・宮西 邦夫 (新潟大学
公衆衛生学)
豊嶋 英明
山添 優・相沢 義房 (同
和泉 徹・柴田 昭 (第一内科))
突然死急性心筋梗塞発生調査委員会

昭和59年—61年度の新潟県における全死亡小票のなか

から直接死因の経過時間が24時間以内の症例を抽出し、間接死因・その他の身体状況を参考にして主要死因を決定し、突然死と考えられる症例(8766例)について検討した。死因を1, 虚血性心疾患(16.5%), 2, 脳血管障害(19.7%), 3, 他の心血管系疾患(49.9%), 4, その他(13.9%)に分類し性・年齢別頻度, 発症季節変動, 発症時刻変動などについて検討した。また, 3, 他の心血管系疾患については小票に記載されていた既往歴についても検討した。(本研究は新潟県環境保健部の資料に基づいて行った。)

6) 突然死の死因をさぐる

—剖検の意義と問題点—

岡崎 悦夫・清野 俊秀 (新潟市民病院
臨床病理部)
樋熊 紀雄 (同循環器内科)

私共の経験した剖検総数1228症例(S49.4—63.11)のうち、WHOの定義に京都基準を加味して選り出した43例について検討した。急性心筋梗塞14例、肺癌+肺出血4例、大動脈瘤破裂3例、脳動脈瘤破裂2例、肺動脈血栓症2例、誤嚥窒息2例、その他様ざまな疾患が含まれている。症例毎に特徴があり概括するのは難しい。そこで全体を通覧したあと、特に教訓に富む4例を提示したい。1. 術前検査で異常を認めなかった死亡例。2. 右心室形成不全(Uh1病)に合併した心筋炎。3. 無症候性心筋梗塞。4. Thiazide剤による高度な電解質異常殊に低Na血症。

画像診断、電気生理学的検査の発達で剖検軽視の風潮が強い。しかし入念な剖検と定期健診データを含む既往歴や死亡状況の綿密な調査は死因や病態の解明を可能にするだけでなく、臓器相関に基づく疾患像の理解に大きく貢献する。臓器別専門分化の傾向が強い今日、医療の質向上のために剖検は益々必要な手段となっている。

一般演題

1) Cribier-Letacバルーンによる経皮的動脈弁形成術(PTAV)の経験

望月 弘人・風間順一郎
堀 晴雄・加藤 秀徳 (立川綜合病院)
高橋 正・大塚 英明 (循環器内科)
岡部 正明・松岡 東明

Cribier-Letacバルーンにて経皮的動脈弁形成術(PTAV)を施行した大動脈弁狭窄症2例について報告する。